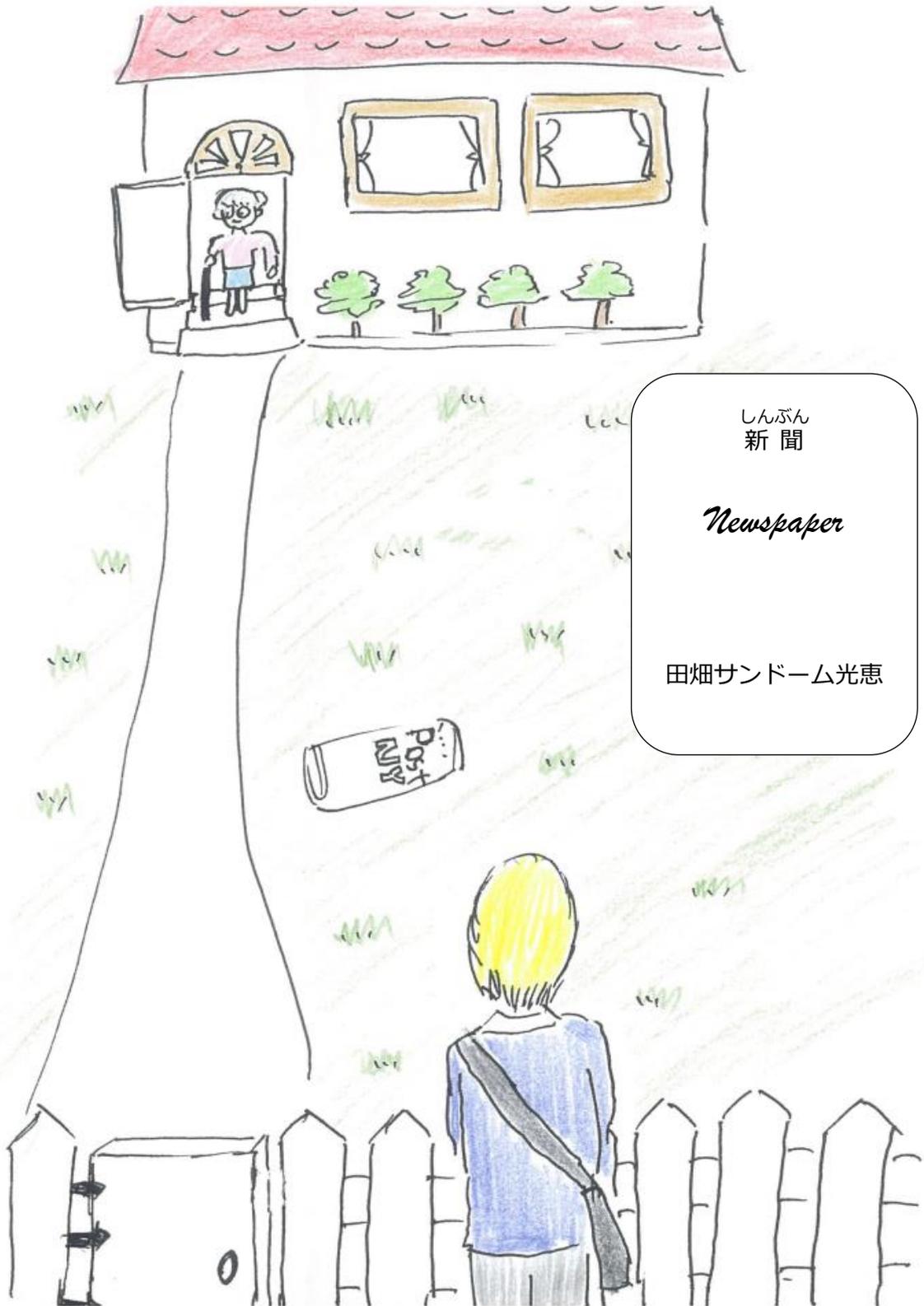


し ん ぶ ん

新聞



しんぶん
新聞

Newspaper

田畑サンドーム光恵

しんぶん
新聞

たはた みつえ
田畑サンドーム光恵

アンドリューは、今年大学を卒業した。最近、大学を卒業しても、なかなかいい
しごと み じぶん こども とき
仕事が見つからない。でも、アンドリューは、ついていた。自分が子供の時からやりたか
しごと ちい つく かいしゃ
った仕事につけたから。小さいけれども、コンピュータのゲームを作っている会社に、
しゅうしょく かれ こども とき だいず こづか
就職できた。彼は、子供の時からゲームをするのが大好きで、よくお小遣いをためて、
あた にか にほん かいしゃ おもしろ つく にほんご
新しいゲームを買った。日本の会社が、たくさんの面白いゲームを作るので、日本語も
べんきょう にほん なんかい あそ い
勉強し、日本に何回か遊びに行ったことがある。

かいしゃ まち ま なか しごと はじ いっ げつまえ かれ かいしゃ
アンドリューの会社は、町の真ん中であつた。仕事を始める1か月前に、彼は、会社か
くるま ぶん まち か ちか ちゅうしゃじょう か
ら車で20分ほどの町にアパートを借りた。アパートの近くに駐車場も借りた。アパー
ちゅうしゃじょう いえ なら
トから駐車場までは、たくさんの家が並んでいる。

あさ しごと い ちゅうしゃじょう ほう ある い とき いえ
ある朝、仕事に行こうと、アパートから駐車場の方へ歩いて行く時、ある家から、
ひとり で あし わる
一人のおばあさんが出てきた。足が悪いようだ。

『どうしたんだろう、こんなに早く。あのおばあさん、どこに行くんだろう』アンドリ
ふ し ぎ おも
ューは、不思議に思った。

おばあさんは、ゆっくりと大変そうに、ドアから出て来て、庭の方に歩いて行く。足が
いた
とても痛そうだ。

アンドリューは、おばあさんの歩いて行く方を見た。草の上に、新聞がころがっていた。

アメリカでは、新聞配達しんぶんはいたつの人は、新聞しんぶんをポストに入れてくれない。庭の草の上に、ポ〜ンと投げなてていく。

『ああ、そうか、おばあさんは、新聞しんぶんを取りとに出てきたんだな』アンドリューは、おばあさんに話はなしかけた。

「おばあさん、足あしが痛いたそうですね。新聞しんぶんをそもちて持って行ってあげましょうか」

おばあさんは、嬉うれしそうに答こたえた。「すみませんねえ。じゃあ、願ねがいします」

アンドリューは、新聞しんぶんをおばあさんの所ところまで持もって行くと、おばあさんの手てをとって、ドアの所ところまで一いっしょに歩あるいて行いってあげた。

おばあさんは言いった。「毎朝まいあさ、大変たいへんなんです。もう年としだから、足あしが悪わるくて。新聞しんぶんを取とりに行いくのも、大仕事おおしごとなんですよ」

アンドリューは、ここう言いった。「おばあさん、僕ぼくは、いつもこの時じかん間ところを通とります。もしよあかったら、明日あしたの朝あさから、毎日新聞まいにちしんぶんを家いえの中なかまで持もって行いってあげましょうか」

「え、そんな、いいんですか！」おばあさんはとても嬉うれしそうだった。

それが、このおばあさんとアンドリューとの出で会あいだった。

かいしゃ つか かんが まいにちしんぶん よ
会社に着ついてから、アンドリューは考かんがえた。『あのおばあさんは、毎日新聞まいにちしんぶんを読よんで
さいきん しんぶんよ ひと おお み
いるのか。最近さいきんは、新聞しんぶん読よまない人ひとが多おほいけど。みんなオンライみンでニユースとか見みるし。
しんぶん わた とき うれ かお しんぶん
でも、あのおばあさん、新聞しんぶんを渡わたした時とき、ととても嬉うれしそうかおな顔かほをしてしんぶんいた。ききつと新聞
よ たの
を読よむのを、楽たのしみにしてしてるんだららうらなあ。。。』

こうしてアンドリューが、朝あさおばあさんの新聞しんぶんを庭にわでひろって、ドアの所ところまで持もって

くようになってから、1年くらいが経った。アンドリューは、一日も休まずに、おばあさんに新聞を持って行ってあげた。土曜日は会社は休みなのだが、彼はわざわざ早く起きて、おばあさんの家まで行き、新聞をひろってドアの所まで持って行ってあげた。

その日も、朝にアンドリューは、おばあさんに新聞を渡してから会社に行った。

その日は、天気がとても悪かった。お昼からは、すごい雨が降ってきた。「嫌だなあ。

今日は、車でいろいろな会社にミーティングに行かなくちゃならないのに。運転が大変だ」

仕事を始めて1年以上たつアンドリューには、たくさん大事な仕事ができるようになった。会社から出て、他の会社に行くことも多い。そんな時は車で行く。アンドリューは、運転がまあまあ上手なのだが、この町はとても車が多くて、運転するのは難しい。だから、急いでいる時でも、気をつけて運転しないと危ない。今日のようなすごい雨の日は、特に気をつけなければならない。

お昼ごはんを食べてから、1時にアンドリューは会社を出て、車で他の会社のミーティングに向かった。やっぱり道は、すごく混んでいる。赤信号から青信号に変わっても、前に進めない。運転している人は、みんなイライラしているようだ。アンドリューも少しずつイライラしてきた。『これだから、雨の日に運転するのは、いやなんだ』

信号の前でずっと止まったままだったので、アンドリューは、自分の会社に電話をしようと思った。明日の事で連絡があるからだ。電話をしていると、急に他の車が動き出した。信号が青に変わっていた。やっとアンドリューも前に進めそうな様子だ。

おも　とき　しんごう　きいろ　か　でんわ　かいしゃ　ひと　はな
そう思った時、信号がまた黄色に変わってしまった。電話で会社の人と話していたアン
ドリューは、少しあわてた。『ここで、また止まったままなんて、いやだよ』そう思って、
おおいそ　き　うんてん　かれ
大急ぎでアクセルをふんだ。いつもは気をつけて運転している彼にしては、めずらしい。

つぎ　しゅんかん　なに
次の瞬間、アンドリューには何がおこったかわからなかった。

ドーン！

おと　かれ　くるま　ひだりがわ　きゅう　はし　だ　くるま
すごい音がした。そう、彼の車は、左側から急に走り出してきた車にぶつかったの
だ。

しりつそうごうびょういん　すこ　かお　きず　お
ここは市立総合病院だ。アンドリューは、ラッキーだった。少し顔にかすり傷を負った
だけだ。でも。。

ひだりがわ　き　くるま　うし　の　くるま　つ
左側から来た車の後ろに、おじいさんが乗っていた。そこにアンドリューの車が突
こ
っ込んだのだ。

な
そのおじいさんは亡くなってしまった。

の　くるま　うんてん　むすめ　ひ
おじいさんの乗っていた車を運転していたのは、おじいさんの娘さんだった。その日、
きゅう　からだ　ちょうし　わる　むすめ　びょういん　つ　い
おじいさんは急に体の調子が悪くなって、娘さんは、おじいさんを病院に連れて行く
ところだったらしい。車が混んでいて、娘さんも、アンドリューのように、とてもあわ
てていたそうだ。

しんごう　あお　か　はや　と　だ　じ　こ
だからまだ信号が青に変わっていないのに、早く飛び出してきた。だから、事故は、ア
ンドリューだけの責任じゃなかった。もちろん、電話をかけていて、そのうえ、黄色の

しんごう と だ ばち あた じこ
信号で飛び出したアンドリューには、罰が与えられる。しかし、事故は、おじいさんの
むすめ せきにん
娘さんにも責任があった。

アンドリューは自分だけが悪くないと言われたが、『おじいさんを死なせたのは自分だ』
おも しかた まいにち かぞく つぐな
と思えて仕方がなかった。そして毎日、『どうしたらおじいさんの家族に償えるんだろう』
かんが じこ ひ ね
と考えた。そして、事故があった日から、寝ることができなくなってしまった。

「ぼくが気をつけていれば。。。ぼくが電話なんかしないで、もっと気をつけてい
れば。。。」

まいにちまいにち かれ じぶん せ
毎日毎日、彼は自分を責めた。

きょう そうしき おこな くろ き そうしき
今日、おじいさんのお葬式が行われる。アンドリューは黒いスーツを着て、お葬式
む そうしき きょうかい つ かぞく わる おも かお
に向かった。お葬式のある教会に着いた。おじいさんの家族に悪いと思うので、顔をあ
げることができない。家族の人が集まっている教会の前の方へ、うつむいたまま歩いて
い かれ ゆか すわ こ おお
行った。そして、彼はいきなり床に座り込んで、大きな声でこう言った。「みなさんの
たいせつ いのち つみ つぐな
大切なおじいさんの命をとってしまいました。どうしてこの罪を償ったらいいか、わ
かりません。いいえ、つぐな こと ほんとう ほんとう
償う事なんてできません。本当に、本当に、すみませんでした。
い
なんと言ったらいいかわかりません」

い
そう言うと、アンドリューは、180センチもある大きな体をおお からだ ふる おお こえ な
を震わせて、大きな声で泣き
だ
出した。

ふる て ちい て い
アンドリューの震える手を小さなしわくちやの手がつつんだ。そして、こう言った。

「もうじゅうぶんですよ。もう大丈夫ですよ」

その声は、聞いたことのある、やさしい声だった。

アンドリューがゆっくり顔をあげると、あの足の悪いおばあさんの、笑っている顔があった。そう、それは、彼が毎朝新聞を届けてあげていたおばあさんだった。

おばあさんは、こう言った。

「あなたが毎朝持ってきてくれる新聞を読んでいたのは、おじいさんなんです。ずっとからだが悪くて、毎朝新聞を読むことが、小さな楽しみだったんです。私はおじいさんに、『とても親切な若者が、毎日ドアの所まで新聞を持ってきてくれるんですよ。笑顔の素敵なやさしい子ですよ』といつも話していたんです。おじいさんは、あなたにとっても感謝していました。事故は、急いでいた娘の責任です。あなたは、じゅうぶん、おじいさんと私を幸せにしてくれました。あなたが毎朝、ああして新聞を持ってきてくれることを、私たち二人はとても嬉しいと思っていたんです」

「もうじゅうぶん、幸せをもらいました」

おじいさんが亡くなった悲しみが大きいので、アンドリューの心は暗かった。だが、その先の方に小さな明かりがともったような気がした。

次の日からアンドリューは、また毎日、おばあさんに新聞を持って行ってあげたのだ。 (1842語)

書いた人／執筆者：田畑サンドーム光恵

てつだってくれた人／執筆協力者：西尾佐知子